

力 ば か

彼の名は力ちからであつた。しかし、人々は彼を呼んで「力ばか」と云つた——永久の子供に生れていてゐたからであつた。同じ理由で人々は、彼に對して親切であつた、——マツチをもやして蚊帳につけ、家を一軒焼き、その火焰を見て拍手した時にでも。十六になつて脊の高い強い少年になつたが、精神は幸福な二歳の年齢にいつも相當してゐた。それで極めて小さい子供と遊び續けた。四つから七つまでの近所の大きい子供は、彼が自分等の歌や遊戯を覚えなから一緒に遊ぶ事を好まなかつた。彼の好きなおもちゃは箒であつた。それを木馬にして遊んだ。そして引續き何時間でも、この箒に乗つて私の家の前の坂を、驚くべく高い笑聲を上げて、いつも上つたり下つたりしてゐた。しかし遂にこの騒々しい聲がうるさくなつて來た、それで私はどこか外ほかへ行つて遊ぶやうにと、云はずに居られなくなつた。彼は素直にお辭儀をして、それから——悲しさうに箒を引きずりながら外ほかへ行つた。いつでも柔和で、火をおもちやにする機會さへ與へなければ、全く無害なので誰にも小言を云はれるわけは殆んどなかつた。私共の町の日常生活と彼との關係は犬や鶏のそれと殆んど同じであつた。それで、彼が最後に消えてしまつた時も、私は別に不足を感じなかつた。幾月も幾月も經つてから、何かの事で力の事を思ひ出した。

「力はどうなつたらう」私はこの邊へ薪を持つてくる老人の薪屋に尋ねた。力はこの男の薪を運ぶ手傳をよくしたものであつた。

「力ばかりですか」老人は答へた。「あゝ、力はかはいさうに死にました。……はい、一年程前に、全く急に死にましたんで、お医者様達は何か頭の病氣だと云ひました。ところで、今そのかはいさうな力について妙な話があります。

「力が死んだ時、おふくろが、力の左の手に、その名前の力はかを書きました、「力」を漢字で「ばか」をかんで書いたのです。それからおふくろは度々、祈願をしたさうで——もつと幸な身分に生れ變つて来るやうにと云ふお祈りなんです。

八 泉 小
「ところが、三ヶ月程前に麴町の何某様のお屋敷に、左の手のひらに、文字のある男の兒が生まれました。その文字は「力ばかり」と全くはつきり讀めました。

「そこでそのお屋敷の人達は、これは誰かの祈願の結果に相違ないと思ひましたので、方々を詮議致しました。たうとう八百屋が、牛込に力ばかりと云ふ子供がゐること、それから昨年夏に死んだ事を知らせて來ました。そこで二人の下男をやつて、力のおふくろを尋ねました。

「下男達は力のおふくろを見つけて、事の次第を話しますと、おふくろは非常に喜びました。——その何某様の家は大層富んだ名高い家でしたから。しかし下男達は、その御屋敷では赤ちやんの手の「ばか」と云ふ字で大層立腹しておいでになると云ひました。「一體お前さん處の力さんの墓はどこですか」と下男達は尋ねました。「善導寺の墓地でございます」とおふくろは答へました。

下男達は「どうか墓石のかけを少し下さい」と頼みました。

『そこで母親と一緒に善導寺に行つて力の墓を見せました。それから下男達は、墓石のかけを少し風呂敷に包んで持つて行きました。……力の母親には金をいくらか——十圓だか、やりました』……

『しかしそんな石のかけをどうするのだらう』私は尋ねた。

『左様』老人は答へた。『そんな名を手のひらに持つたままで生長するわけには参りませんから。ところでそんな風に子供のからだについて来た文字を除くには、どうも外に仕方ありません。その前生のからだを葬つてある墓石から取つた土で皮膚をこすらねばなりません』……

(田部隆次譯)

Riki-Baka. (Kwaidan.)